

ラーゲルや青空集会の人民裁判で“反動”“戦犯”の烙印を押されて、再度遠くの戦犯ラーゲルに送り戻される人も多くいた。また、乗船してから上陸する船中で、つるし上げにあつて絶命した人もあるなど、日本人同士による迫害もあつたと聞いたからである。私たちの乗った高砂丸は航行二日目に舞鶴の栈橋に静かに停泊した。“ああ、無事帰国できた、よかった”と全く感慨無量、文句なしに涙がほおをぬらした。

あのシベリアの地で厳しい風雪、寒さをしのぎ、粗末な食糧と過酷な労働に耐えて今ここに、ずっと思い、願ひ続けてきたタモイの夢が実現した。うれしくありがたいことである。

ソ連抑留雜記

静岡県 鈴木 速男

収容所へ着いたのは昭和二十年も押し詰まった十二月の下旬であつた。

思えば南満の綿帛を出発し、一路北上して黒河まで一か月、黒河で流水が始まった川を凍らせる作業を行い、川が氷に閉ざされるのを待って猛吹雪の日にブラゴエシチェンスクまで徒歩で行軍し、そこで貨車に乗り、チタイルクーツク、アルマアタ、タシケントを経て約一か月余り、やっとウズベック共和国はパミール高原のご真ん中にあるヒルコアというひなびた駅にたどり着いた。この間、五十トン有がい貨車を連ねた列車はノロノロ運行をしたり、夜通し走ったり、時には二日も三日も停車していたりで、好き勝手の旅に見えた。この入ソ行で一番難儀だったのは生理現象であつた。列車の途中の線路上でとまれば、貨車の中から飛び出した兵たちが一列横隊で大小の便の砲列をしく、有がい車上のソ連兵が早く乗れと空に向けて発砲する。機関車はポーポー汽笛を鳴らす。列車が一旦停車すれば、いつもこの状態が現出した。貨車の中には軽く開いた便所らしきものはあつたが、このような状態でベゴワード地区の第二収容所へ入つたのであるが、これに加えた輸送中の給与が人間並みでなかったから、(その後も同じであるが)ほとんどの者は体

調をくずし、下痢、風邪等に悩まされ、その後のラーゲル生活に多大の影響を与えた。医務室はあったが、それに対応できる状態ではなかった。

この地区の作業は、パミール高原を縦断して流れるシルダリア川をせきとめて発電所を二か所つくることであった。第一、第二ラーゲルの人員がボルショイゲス（大発電所）、第三ラーゲルがマーリンキゲス（小発電所）を担当し、ゲスとゲスの間は約十キロくらい離れていたように思う。

さて、第二ラーゲルに入った我が梯队は、中隊ごとに泥土でつくられた半地下の宿舎に入れられて二、三日環境の整備を行った。この時点で作業、陸作業（オカと言った）営内勤務とに分けられた。このとき、私は下痢がひどく、熱も高く、軍医から腸チフスと診断され、二人部屋に隔離されたが、薬らしい薬もなく、絶食絶水のみが治療法であった。個室に入れられた三人が話すことといえず、故郷のこと、家族のこと、食物のことと決まっていたが、この両側の戦友も旬日を経ずして死んでいった。だれ一人とてみとる者としてなきこの辺境の地で

寂しく死んでいった二人を見て「こんなところで死んでたまるか」と心に言い聞かせながらも、一人になった個室の天井に向かって産土（うぶすな）の神と多賀神社、それに先祖の霊に手を合わせ「どうか、生きてかえして下さい」とひたすら祈った。それかあらぬか、その後病氣も軽快し、何とか軽作業にまで出られるようになったとき、中隊と第三ラーゲルに転出を命ぜられた。

第三ラーゲルの作業はマーリンキゲスの建設に関するすべての作業であり、発電所本隊の建設、タービンの取り付け、放水路の建設、送電用アングルの組み立て運搬等々であった。私は病気がりのため、軽作業班に編入されたが、作業は炊事用の枯れ草集めや、ラーゲル内を流れる小川の清掃等であった。腹が減るので、川の掃除に行ったときには、殿様ガエルを奉公袋いっぱい詰めて込んで帰り、皮をむいたカエルの足をスコップの上に乗せて焼いて食べたこともある。

ここで少し、ラーゲルの食事や気候等に触れてみよう。食事は病んでない限り、食堂ですることになっていた。食堂といっても日本の昔の大衆食堂を大きくし、

テーブルを一枚の長板にして何列も並べ、土間は上と
いったぐあいのお粗末なものである。食事といえばブリ
キの食器（軍隊の飯食器くらい）に七分目のおかゆ、そ
れもモミ殻付き四十も混じった燕麦である。食べるとい
うよりすすると言った方が適當かもしれないしろもので
あり、私も軍隊時代にはコウリヤン飯や豆ガス（馬の餌）
等も食べた経験もあって食物には動じない方であるが、
これには参った。口の中でモグモグして舌でかみ分けす
るが、殻を吐き出すときに、中身まで付いて出たときの
もったいなさ、涙が出るほど悔しい思いをした。調味料
といえば塩だけであり、副食はなくおかゆの中に細く
切った乾燥ジャガイモが二切れも入っていようものな
ら、上の方だった。また、時には酸っぱいキャベツの漬
け物が混入していることもあった。

このような食事状態がしばらく続いたある夕方時、奇
異な現象を目のあたりにした。夕食を告げるスリ板が
鳴った後、班員が一人両手を前に中を探るようにして歩
いて行くのである。変に思っただけに行き聞いてみる
と、暗くて前がはっきり見えないと言うのである。これ

には驚いて食事を済ませた後に医務室へ連れて行った
が、栄養失調よりさせた鳥目だとのことであった。この
ことが皆に伝わると、軍隊時代によく言われた「馬が食
べる草は人間も食べれる」という言葉どおりに道端の野
草をとってきて水で洗い、おかゆの中に入れて食べるよ
うになった。特にアカザなどは最たるビタミン源であっ
た。

その後の食事は、大豆のおかゆが一週間も続いたかと思
うと、米がゆになったり、ひどいときには緑豆（グリ
ンピース）ばかり十日も続き、作業隊から苦情が出され
たこともあった。黒パンはノルマによって多少があっ
た。大体が黒パンというしろものは、ほんの少しの小麦
粉へ魚や野菜を粉にしてまぜ、焼き上げたもので、一個
約四キロであったが、その硬さは凶器にもなりかねない
くらいのしろものであった。

気候は雨が少なく、冬ほど寒く、雪が積もり、風の吹
く日の夜間作業で生コン内や土工作業はつらかった。夏
は非常に暑く、メロンやスイカ等は日本のものより大き
く、味も比較にならないほどよい。この地方は土は粒子

が細かく乾燥しているせいか、手で土を握りしめても、指の間からさらさらとこぼれ落ち、手の平に土は何も残らない。そのような土だから、くわでおこし、水を注いで一晚おくと、素晴らしい泥土ができており、それをれんがの大きな木枠に入れてひっくり返し、天日に乾すと見事な泥れんがの出来上がりとなる。この地方の家はこの泥れんがで大多数がつくられていた。第三ラージェルも全部のこの様式でつくられていた。パミール高原は、一望千里の平らな草原で、はるか南の地平線にはアルタイ山脈が一条の線のように連なってみえる。樹木はなく、風に枯れ草がくるくる転がるさまは西部劇を見ていると思えばよい。このような土地に陸亀が棲息していたのには驚きだった。

先にも記したが、泥れんがでつくられた半地下の宿舎は夏は暑くて、夜はとても寝られる状態ではなく、みなわら布団と毛布を表に持ち出して、外で星を仰いで寝た。しかし、この地方独特のパパチカと呼ばれるマラリヤと同じ症状を呈する病気があり、大部分がこれにやられてキニーネ、ヒニン注射等の世話になった。私は

内地帰還のため、乗船した高砂丸でも発病し、最後の最後まで苦しめられた。ソ連医学は予防医学であり、臨床医学は進んでいないようだった。

月日のたつうちに食事の内容も多少は好転したが、量は相変わらず少なかった。このころまであまり気にもとめなかったことで、あることに気がついた。それは、自分の隣の戦友が発病して欲しい。それも生死には関係なく、熱を出して練兵休くらいで休む病気を……。なぜなら、発熱で食事のできない戦友の分を食べられるからだ。

私は、生きてゆく人間の最後の姿を見たような気がした。また、それほどラージェルの食事は貧しく少なかったのである。

私はその後また第二ラージェルに移動したが、最初に入所したところとは大分違い、食事も質量ともに多少はよくなっており、ラージェル内の民主化一色に塗りつぶされていた。このラージェルはドイツ兵捕虜のためにつくられた、と作業現場で行き会ったドイツ人技師から聞かされ、作業を拒んだドイツ兵は食事が支給されず、そのために革帯や革靴をゆでて食べていたが、栄養失調で使者

が続出し、それを埋葬した土鯉頭がラーゲルの西側にあらるとのこと、以前から不思議に思っていたことが解けた。なお、このドイツ人技師は二十年後には日本とドイツが手を結んでソ連をたたこうというて、微笑しながら握手を求めてきたのには驚いた。

捕虜という特殊環境の中にあつてさまざまな条件を強要され、人間以下の最低生活の辛酸をなめさせられたことは、ある意味においては強靱な精神力の培養となり、その後の人生にプラスになったことは事実である。

ソ連抑留手記

京都府 武内 敏次

応召・終戦

昭和十四年五月渡満、吉林省敦化県第八次青満子開拓団へ入植する。原野を開墾し十部落を建設する。在籍二百十五世帯、人口七百六十四人（昭和二十年現在）昭和二十年八月一日応召す。（満二十歳の徴兵検査では丙種

第二国民兵役）昭和十九年よりの応召者を含めて、団員の出征八十人となる。入隊は新京部隊で、編成後数日して作業に出る。小隊ごとに二、三人の転属兵が装備されているのみで、召集兵は丸腰でスコップ一丁持って、ソ連戦車の侵攻に備えて新京市街各地に対戦車壕とタコ壺を掘る作業が連日強行されて、八月十五日の終戦に至る。

八月二十日ころ、部隊の兵器はソ連軍に撤収さる。それより毎日小隊ごとに貨車に物資積み込みに出動する。ソ連兵監視のもとに、米麦雑穀などの食糧のほかにあらゆる物資を積み込んでソ連へ搬出する。九月上旬雑穀を積んだ列車に連結された有がい貨車に我々は一車両五十余人牛馬のごとく詰め込まれた。それが幾十両も続く。車両のつなぎ目ごとに小銃を構えたソ連兵が監視にっていた。列車は北へ新京を出発した。

このまま内地へ帰れるとすれば、開拓団に残した妻子はどうなるんだろう。ソ連で重労働されるなら果たして内地へ帰る日が来るのか。我々は捕虜なのか。ソ連は我々をどうするつもりか、生か死か。ウラジオストック